

令和三年十月七日(木)

新型コロナ感染防止のため「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『天高し・秋高し・空高し』『引』

宮原 凧

桐一葉戸籍一人となりにけり
廃校の隅にカンナと金次郎
新米を生者へ死者へ二合炊く
間引き菜を和えて及ばぬ母の味
箱根まで窓の広々秋高し

中村 晃也

天高し鳶を浮かせる浜の風
朝露に裾を濡らしてストレッチ
天職と胸はる爺の秋野菜
伏せて待つ盲導犬やいのこずち
鰯雲一村総出の地引網

内藤 あした

秋桜手折りて今日の御正客
引き潮に笹いっぱい浅蜷かな
紅葉狩りに頬を染めけりコロナ明け
引き出しは俳句三昧秋麗
天高し運動場の万国旗

首藤 しずを

新畳ばんと敷きこみ天高し
コスモス揺る空の蒼さの深ければ
引退の力士饒舌ざくろ爆ぜ
庭師らの影絵となりて寺の秋
北欧神話長き夜に冴えざえと

斉藤 まさお

何もかも知った顔して鬼やんま
赤ちやんの伸ばす手のひら天高し
天高し気の向くままの路地そぞろ
おみくじを引けば小吉九月尽
死に場所を求めて青し秋蛭

森田 元斐

家屋無き庭に名残の彼岸花
床の花整へて今日の月
それでもと宮掃く人の秋祭
引き潮の速さに惑ふ秋の蟹
ブランコへ伸ばす靴先秋高し

大津 そうかい

縁側の黙せる二人柿日和
引率の若き先生秋高し
秋の蚊ややさしく打ちし己が頬
秋深しどこに眠るやかの守宮
引潮や別れを告げし秋の浜

安藤 晃二

草原に飛ぶフリスビー秋高し
リハビリの牽引の窓ちちる鳴く
小望月雲薄墨に囲みをり
見上ぐれば丸の内線秋天に
秋の園セージの青にときめきぬ

志村 良知

名月の障子に明く寝もやらず
空渉る名月避くる雲白し
母の忌に木犀大樹帰り咲き
水引草群れてもつれて花の白
秋高し宝永火口雲を吐き

新田 ゆふき

うたた寝や素足の冷えて秋初むる
掛時計止まりておりぬ秋彼岸
秋の陽の式部の珠の小紫
天高し山並み望む白馬像
水引草竿さす先や蝶揺る

高橋 由紀子

新米を引き当て嬉し二等賞
文机の野花に加え吾亦紅
秋深し断捨離の服束ねみて
父の墓前かの人の植えし曼珠沙華
天高しチビサッカーにお下げの子

長尾 進一郎

音も無き淡き機影や秋高し

歳毎に引き算鈍(のろ)し秋の風

難民の如き虫たち草抜く日

息切らせ坂の頂き盆の月

草露の七色に輝る朝の土手

西川 知世

風紋の果の波音秋の暮

秋高しメト口地上に浮び出て

連峰の星と眠れる稲架襖

引く潮に沖の色増す秋の浜

水引草の緋を奔放に栄螺堂

次回は令和三年十一月四日(木)、新宿御苑にて

囑目吟行を行います。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

高浜虚子著『俳句読本』に「写生とは実際の景色を見て句作することでありませう」という一文がある。同じ場所を歩いた後、仲間と出来立ての句を披講し合うのは、俳句の醍醐味。今回は、海外旅行で詠まれた俳句を紹介する。海外旅行が私た

ちの生活に身近になり、海外詠というジャンルが生まれた。季語を第一にしている俳句だから、なかなか難しいが虚子の言う実際の景色をみて作るのであるから、心打つものが多い。たくさんの名句があり、旅心が募る。海外俳句の定義では、「日本人が海外において詠んだ日本語の俳句をいう」。短期の旅行ではなく、長期に海外に滞在する日本人の俳句を、別に「在外詠」と区別することもあり、外国人の外国語による「海外のハイク」とは区別する。戦前はいわゆる洋行できた日本人の数はきわめて限られたが、戦後それも昭和四十年頃における海外渡航の自由化とともに盛んに詠まれるようになり、国際交流の一つの側面となる。(参考・山崎ひさを著・海外で詠む) 芭蕉以来、俳句は旅・吟行が基である。

鰐の居る夕汐みちぬ椰子の浜

高浜虚子

おとがひに月光あびて窟の佛

松崎鉄之助

隊商に会ふ秋雨の橋袂

中村汀女

日本語をはなれし蝶の八ヒフヘホ

加藤楸邨

菩提樹の並木あかるき白夜かな

久保田万太郎

瀑布みな身を逆さまに落ちあたり

山口誓子

モロツコの次は羅馬の月を見に

草間時彦

辻楽師唄ひ世寒の街にぎはふ

岡田日郎

葉騒ぎの椰子の上なる星月夜

鷹羽狩行

金色のコーランの文字枇杷熟るる

有馬明人

火取虫船の灯に来て船に死す

山崎ひさを